

2022年1月30日 河内地区有志教会講壇交換礼拝(降誕節第6主日礼拝)

メッセージ「マスクありでも仮面なしで」

八尾東教会・平松洋一牧師

聖書 マタイによる福音書 6章1-15節

皆さん、おはようございます。八尾東教会の平松です。コロナ禍ではありますが、今日は講壇交換礼拝ということで久宝教会の皆さんとご一緒できてよかったです。同じ市内の教会ですから、どうぞ宜しくお願いします。

さて、かっこ悪い思いをして恥ずかしかった、とか、かっこ良く見せようとあれやこれやと画策する…なんていう経験は、誰にも1つや2つあるものです。そういう中で、他人を気にしすぎて仮面をかぶり続けることもまた精神的に疲れてしまうものです。私たちが生きている現場はいろいろな人がいて、多様な価値観が共存していますから、それぞれが自分勝手に生きていけば混乱が起きます。混乱は誰にとっても嫌なことです。できるだけ穏やかに暮らしたいと思うことは自然なことです。だからと言って仮面をかぶることは自分を偽るということでもあり、それはそれで不自然なことです。現代社会のいろいろな歪みの中でそのバランスがとても難しく、生きづらい世の中になっているのも現実。コロナ禍の今、互いの感染予防のためにマスクをする必要がありますが、コロナ禍になる前から、対人恐怖からずっとマスクをして仮面をかぶらなければ安心できないという人がいるほどです。だからこそ、今日は「大前提」を思い起こしたいと思います。

「マタイ福音書」6章1節以下、イエス様は、彼らの時代の人たちにとっては伝統的な3つの宗教的善行である「施し」「祈り」「断食」を例にあげて、自分を偽りがちな人間の浅はかさを指摘しながら信仰者のあるべき姿を教えられました。信仰に基づく善い行いは、内容が何であれ、そこには思いやりの心というものがあります。ポイントカードのようにご褒美がいっぱい溜まっていくというものではありませんが、神様の大きな愛によって生かされている者としては信仰の証しでもありますから、とても大事にしたいことです。「証し」ですから、それは「人に見られる行為」でもあり、同時に「人の目から隠されるべき行為」です。その間を行ったり来たりしている中で、私たちはいったい何を大事にしなければいけないのでしょうか。

先ほど「仮面」という言葉を使いました。似たような言葉が実は2節に出ています。

「だから、施しをするときには、偽善者たちが人から褒められようと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。」…どこに出てくるのかと言えば、「偽善者」を意味する原典のギリシャ語には、第一義的に「俳優」という意味があるんですね。「俳優」は人に見られるために本来の自分でない仮の姿、仮面をかぶった姿を演出することによって報酬を受けます。また「ラッパを吹き鳴らす」というのは虚栄心の表れ、見栄を張るといって誰にでも覚えのある人間的な行動を表現しています。

皆さん、どうでしょうか。人に見られる行為としての祈り、つまり人前で祈るということを考えた時、言葉が乱れたりしたらかっこ悪いから人前で祈るのはちょっと…と尻込みしたくなりますね。それもまた虚栄心の一つかも知れません。大事なものは祈りとは誰に聞いていただくのかということです。それは神様です。私たちは「人前」を意識した時に、それを忘れがちになってしまうのです。

その神様は、私たちがどう取り繕うとしても、そんな演技はお見通し、そのまま大丈夫だよと言っておられます。聞いていただくのは、見ていただくのは、そういう神様のはずですが、その神様も隠れたところにおられるお方、つまり目に見えないお方ですし、なかなかそうもいかない私たちの現実。たとえそれが信仰に基づいた善い行いであっても、徹底的に人の目から隠すことができないかも知れません。人の評価が気になって仕方ない、あの人にこの人によく見られたいという思いが前に出てしまうからです。だから、そういう下心から解放されるためにも「奥の部屋に入って戸を閉め…」と言われるのですが、右手のすることを左手も知らないほどに「下心ここにあらず」とはなかなかならないものです。隠すどころか、これ見よがしに「大通りの角に立って」「くどくどと述べ」て、仮面を何重にも重ねてしまいます。

しかしイエス様は、何重にも仮面を重ねなくてもいいよ、というのです。なぜなら神様は願う前から、あなたがたに必要なものをご存じ、つまり神様は仮面の下の本当のあなたの思いを、あなた自身をすべてご存知なのだから、もっとシンプルでいいんだよ、神様はありのままのあなたが向き合うことを一番に望んでいるんだから覆い隠すようにいろいろと付け足す必要はないんだよ、というのです。そのことを私たちの脳裏に焼き付けるために、イエス様は一つの祈りを教えてくださいまし

た。それが「主の祈り」です。

祈りにおいて、私たちは祈りの聞き手である神様をまず呼びかけます。それが、イエス様が批判対象としている人たちは、自らの敬虔さを見せびらかすために、仰々しく回りくどい言葉をつなげて神の名を呼んでいたことでしょう。それは神という存在が実はその人にとってとても遠い存在であることを証明しているようなものです。でも、幼い子どもがお父さんを「パパ」と呼ぶように、「アッバ」と呼んでいたイエス様にとってはまったく違っていました。「イエス様はインマヌエルと呼ばれる」、マタイが預言者イザヤの言葉を引用してそう宣言したように、「インマヌエル＝共にいる神」ですから、近いのです。それはイエス様にとってそうであるように、イエス・キリストの名によって祈る私たちもそうです。「ガラテヤの信徒への手紙」4章6節に「あなたがたが子であるゆえに、神は『アッバ、父よ』と呼び求める御子の霊を、私たちの心に送ってくださったのです。」とある通りです。「あなたがたが子であるゆえに」とは、私たちは最初からその存在を「良し」とされている、ということです。だからこそ、神様にとっては、あなたも仮面をかぶらなくても、取り繕わなくても、本来的に素晴らしい存在なのです。

マスクと聞くと、今や口や鼻を覆う衛生用品としてのマスクを真っ先に思い浮かべるかもしれませんが、英語では仮面という意味もあります。コロナ禍の今はお互いの感染予防のためにマスクをする必要はありますが、神様の前に自分を偽る仮面は必要ありません。最初からその存在を「良し」とされているわけですからね。神様は、私たちが自らマスクの下に、仮面の下に隠してしまいがちな、本当のあなたと出会いたいのです。それが大前提なのです。